

Title	宮沢賢治の「教育思想」： 近代仏教・大正新教育・農村との関係をめぐる思想史研究
Sub Title	
Author	深田, 愛乃(Fukada, Aino)
Publisher	慶應義塾大学大学院社会学研究科
Publication year	2024
Jtitle	慶應義塾大学大学院社会学研究科紀要：社会学心理学教育学： 人間と社会の探究 (Studies in sociology, psychology and education : inquiries into humans and societies). No.98 (2024.) ,p.100- 102
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	2023年度博士課程学生研究支援プログラム研究成果報告
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN0006957X-00000098-0100

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

宮沢賢治の「教育思想」 —近代仏教・大正新教育・農村との関係をめぐる思想史研究—

深田愛乃

1. 研究目的と内容

宮沢賢治（1896–1933）は、同時代の文学・農業・仏教・教育などの知識を吸収し、それらを独自に融合した思想世界を形成していた。従来、宮沢賢治はその多面性ゆえに農業や仏教などの個々の分野から分析されてきた。しかし、個別分野に限定する研究では、賢治の一面的な顔を捉えるに留まり、賢治の思想の全体像を積極的に明らかにすることはできない。そこで本研究は、思想史の手法によって、歴史的な文脈を踏まえつつ教育や仏教、農村に関する賢治の実践やテキストを横断的に考察し、明らかにした事実を配置することで賢治の「教育思想」を浮かび上がらせることを目的とする。

具体的な研究内容は、以下三点のテーマで構成される。第一に、賢治への近代仏教による影響を検討する。真宗からの受容・離反を踏まえた上で、賢治における重層的な信仰世界の様相を明らかにする。第二に、賢治と大正新教育における思想的関連性の検討を行う。賢治と新教育実践家との交流の実態を調べ、賢治が新教育のいかなる側面に共鳴していたのかを明らかにする。第三に、賢治による農村改良・農業教育実践を検討する。賢治が実践した農業教育内容を調べ、賢治による農村改良の方向性について科学面・思想面から明らかにする。最終的に、以上の成果を配置することで見えてくる、新教育思想・仏教思想・農業思想を有機的に結びつけた「個性」概念の内実から、賢治固有の教育思想を浮き彫りにする。

2023年度春学期は、第二の大正新教育と賢治の思想的関連性の調査を進めるとともに、第一のテーマに関連する短歌作品に表れた仏教信仰の検討を行った。なお、2023年9月末に単位取得退学したことにより、次の研究成果報告は在学中の春学期までのものとなる。

2. 2023年度の研究成果

(1) 佐藤瑞彦による綴方・作文教育「創作」と組合教会的キリスト教信仰

——宮沢賢治との対比のために

本年度は、賢治が岩手県の新教育実践者の旗印として着目していた佐藤瑞彦^{みずひこ}（1893–1981）に焦点を絞った。佐藤は、岩手県師範学校附属小学校の訓導を務めたのち、自由学園初等部の主事となった教育者である。賢治は、佐藤の教育実践やその背景にある思想のいかなる面に着目し、一方で両者はいかなる面で相違を生じさせていたのか。今後賢治の教育思想との対比を行うため、本年度は佐藤による綴方・作文教育「創作」の実践に光をあて、その思想を支えた組合教会的キリスト教信仰の影響を探ることを試みた。

佐藤瑞彦は1893年（明治26）、岩手県水沢町に生まれた。1913年（大正2）に岩手県師範学校を卒業し、同校附属小学校（1926年より岩手県女子師範学校附属に移管：以下、附属小と略記）の訓導となり、自由学園に招請されるまでの15年間在職した。附属小では図画・国語の研究主任となり、岩手県の新教育の推進者として注目された。

佐藤は附属小の訓導となって以来、読方教育に力を入れており、副読本の編纂にも取り組んでいた。国語副読本は、1920年代頃、国定教科書への批判や雑誌『赤い鳥』（1918年創刊）にはじまる児童文芸運動、文芸評論家・片上伸による教育に対する文芸の必要を述べた「文芸教育論」の存在を背景に数多く民間で刊行された。佐藤は国定読本を文章の個性に乏しいものとして捉えていたため、文学的な読み物を副読本の教材として選定していた。また1925年（大正14）の第二学期からは、綴方教育の指導も始められた。

「創作」の授業は、佐藤が自由学園初等部主事として着任した1928年（昭和3）より始められた。この科目は、1941年（昭和16）「国民学校令」公布の後も「国民科」の中に組み込まれるなどし、戦前から戦後にわたって長く続けられた。「創作」では、家族や地域を題材とし、互いに読後の感想を読み合う実践が試みられるなど、子どもたちが組織する社会へと眼差しを向けさせることを意図した取り組みが行われた。自由学園の教育方針は、学校を一つの家族や社会として捉えるというものであった。自由学園に移った佐藤はこれに則り、クラスや家庭を一つの社会と見て、子どもの生活を導く根本原則を子どもたちの横のつながりに据える教育を強調した。これにより、子どもたちは自分の属する社会の構成要素となっている意識を持つことができるようになってきたのである。

佐藤の社会観は、自由学園の教育方針に共鳴したものであったものの、もともとは佐藤のとらえた教会の存在意義が起点であったと考えられる。佐藤が属した組合教会とは、会衆派の日本での名称であった。会衆派はプロテスタントの一派であるが、その特色は独特な教会政治を行った点にある。会衆派は主教や長老会などに依拠せず、信仰者の交わりとしての全国組織を持つ各個教会が直接的にキリストにつながるという立場に立った。

重要なことに、佐藤は子どもを人格的存在として扱うことを強調し、社会を構成する個々人は人格的存在たるべきであると考えた。こうした自由と責任を持つ人格同士の結びつきは、組合教会の発想と繋がっている。組合教会では各個教会また会衆一人ひとりの自由と相互の連帯が唱えられたことで、それぞれの主体的責任が要されることとなったのである。

もちろん、社会の中で個々人の立場が決まるとする発想が戦時下でも弾圧を受けることのない論理に変容し得た点には留意が必要である。しかし、基本的な発想としては、個々が互いに他者を容れ合ったものであり、そのためには経験や生活目標の共有が重視されるようなものであった。また「創作」は継続的に書いていく実践であったが、それは組合教会に由来する人格としての子どもという発想があったからである。「創作」の基底には、子どもの文章に生命に発する個性が表れていくことへの信頼があったと言える。

本成果は、2023年度全国大学国語教育学会春季大会にて発表した（深田愛乃「佐藤瑞彦による国語科作文教育「創作」の実践と思想—組合教會的キリスト教信仰の影響を探る」全国大学国語教育学会第144回春季大会、島根大学、2023年5月）。今後は、童話に教育的意義を見出していた賢治と瑞彦が、前者は自ら書くことへ、後者は子どもたちに書かせることへと向かった思想的な背景について、両者の信仰を手がかりに対比的に描き出すことが課題となる。

なお、春学期中には佐藤瑞彦や藤原嘉藤治等の岩手の新教育に関心を寄せた実践家と賢治との思想的な関連性の問題にも着手したが、その後検討を進め本成果を2023年度宮沢賢治研究会例会にて発表した（深田愛乃「宮沢賢治と岩手大正新教育の思想圏—佐藤瑞彦・藤原嘉藤治・菊池武雄を中心に」宮沢賢治研究会326回例会、渋谷区氷川区民会館、2023年12月）。

(2) 宮沢賢治の短歌作品に表れた仏教信仰

本テーマでは、主に賢治の短歌作品に表れた仏教思想を検討した（宮沢賢治研究会編『評釈 宮沢賢治短歌百首』蒼丘書林、2023年9月、分担執筆）。1921年（大正10）年4月初旬、家出・上京中であった賢治は父・政次郎に誘われて関西旅行へ出かけた。この旅行中に詠まれた短歌は「大正十年四月」としてまとめられている。「ねがはくは／妙法如来正徧知／大師のみ旨成らしめたまへ。」（歌稿B775）は、その中の「比叡」と題した歌群の初めの一首であり、比叡山延暦寺の根本中堂にて詠まれたものである。「大師のみ旨」については、伝教大師が比叡山に籠り修行をしていたときに誓願を起こして書き記したという『願文』が思い起こされる。大師はこの『願文』の中で五つの誓願を立てた。特に重要だと思われるのは、五つ目に誓った「三際ちゅうげんの中間に修するところの功德は、独り己が身に受けず、普あまねく有識うしきに回施えせして、悉く皆無上菩提むじょうぼだいを得せしめん」である。この頃の賢治が目にした可能性が高いと推定される『本化聖典大辞林』全3冊（師子王文庫、1920年）には、「伝教大師」の項にその『願文』が引用されている。五つ目の誓願に続く次の文には、何よりも願わくは、苦しみから解放された喜びを一人だけで味わうことをせず、安らかな境地に一人だけで至ることもせず、この世のあらゆる生き物とともに悟らんことを、とする五つ目の誓いの繰り返しとも見える文言が見える。「ねがはくは」という初句の重なりから連想すれば、「大師のみ旨」は、伝教大師の『願文』にある一切衆生とともに済度することへの切なる志を意味するものと考えられる。

次に、「塵点の／劫をし／過ぎて／いましこの／妙のみ法に／あひまつ／りしを」（原稿断片等257）の短歌は、「雨ニモマケズ手帳」の鉛筆差しのところへ差し込まれた、細く丸められた洋紙に鉛筆書きされたものである。この歌については、『法華経』如来寿量品第十六や常不輕菩薩品第二十との関連を指摘することができる。天台教学やそれを引き継ぐ日蓮は、久遠の昔に釈尊が成道していることを明かした寿量品以降を、それ以前の「迹門」に対する「本門」の教えであるとして重視した。さらに常不輕菩薩品の終わりには、次のような偈文が唱えられる。はかりしれない長い時を経て何度も生まれ変わり、ようやく遭い難き法華経を聞くことができる。それ故に、修行者は仏滅後にこのような経を聞いて疑いを生じてはならず、当然一心に広くこの経を説くべきである。「塵点劫の歌」は病床いまにある中で、命終の間際に『法華経』を聞くことのできた不輕菩薩に思いを馳せ、「時に乃し是の法華経を聞くことを得」（常不輕菩薩品第二十）た感慨を詠んだものと言える。

謝辞

佐藤瑞彦関連資料の閲覧にあたり自由学園アーキビスト・菅原然子様と岩手大学教育学部附属小学校副校長・齋藤桂孝様に、また藤原嘉藤治関連資料の閲覧にあたりNPO法人ポラーノの広場代表・瀬川正子様と陸前高田市立博物館に多大なお力添えをいただきました。末尾になりましたが、ここに深く感謝申し上げます。